

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 5 (2)

—— 1924年9月1～30日 ——

小池辰雄

○1924年9月1日 (月)

雨。秋が来た。夏が去った。去年の大震災当日である。正に1周年記念日である。9月1日を赤倉に送ろうとは思わなかった。今年の避暑は長かった。40日に及ぶ。赤倉の浴客中で恐らく最長期間に亘るものは僕であろう。大正12年9月1日の大椿事より引き続き恐慌の日々は今なお歴々として頭に浮かび来る。復興1年、これから2年目に入る。我もまたしつかりせよである。

今日は終日、烟雨にとざされた森閑寂寞たる日である。雨の赤倉、大自然は実に言語に絶するものである。ああ自然、自然に育まれる者は幸なる哉である。東京、虚栄塵埃の市、何で彼の地が慕わるべき。我は自然に育まれん。然れども、我に務めあり。赴かざるべからず。また快なり。神の御意なればである。

午前11時58分、丁度食事中、一寸箸を置いて去年を思った。

大工仕事場へ行つて、大工さんと物語る (小屋の前を通り何の気なしに立ちよった)。この大工さんなる人は、身の丈5尺6寸〔約175cm〕余、体重17貫〔63.75kg〕余、年齢はと云うと驚くなかれ、18才である。炯眼の士、而も温良愛情に富む。自然の寵児、ああ偉なる日本武士にして神の赤子。彼を男と言わずして何人を男と言わん。彼は謙遜にして容易に己れに關することを言わず。遂にその名を言わず、性は北村と云う。

彼の言ったことを断片的に記してみると、彼は小学校のとき田口から赤倉まで1里10余町の道を、18分でのぼったとのこと。また、3間の幅跳をなしたとのこと。また、和歌で佳作あり、佳雪と云う号を先生からもらったとのこと。彼の現在このんで読むのは、トルストイの作、シェイクスピアの作、それから何でも淨きことの書いてある書、ホイットマン詩集、聖フランシスの小さき花、完全の鏡、及び伝。武者小路さんの書、坪内逍遙の積書。彼はなかなかの読書家でもある。自然の崇拜者である。小説、所謂現代の小説なるものを好まぬ。恋愛小説などはまっぴらである。有島さんのものをきらう。彼の性は、誠に僕のに類似している。言うことは皆同感同感である。彼、此年の2月、独り雪の山に登ってホイットマン詩集を繙き、大自然を仰ぎ瞻、己れの小なると弱きとを痛感して、何ものか偉大なる力の我を支配するものなかるべからざるを感じ、神なるものの我を守り居たもうに感じ至りたるときに、無限の喜びと感謝とを感じたと云う。この語^{はなし}を聞いたとき、僕は思わず、

「ソウダソウダ、ソレガ貴イ、ソレサエアレバ何モ要ラナイ」



と叫んだ。彼もまたいたく僕の言をよろこんで、神によりて二人の心はその全く扉が開かれ、赤裸々と物語り出した。その神の直感こそ、実に貴きものであること、及び今の教会、教派などのくだらぬことなどを話した。彼はまた、小西某と云う純なる基督者のことも紹介した。彼はこれにより信仰の貴きを知ったと。また彼は言う、すべての本は愛であると。仁義礼智信が本であると云うが、それよりも愛が最大の根本であることを言った。誠に同感なるを述べ而して、永遠の希望なるものを彼に話した。「パラダイス・ロスト」「パラダイス・リゲインド」の話も出た。信望愛の貴きことは自然と二人の口から流れて神の讃美であつた。彼は基督者ではないが、ここまで至りて、彼は立派な一神(論)者、実験の人である。空論の偽基督者になんかまきること数等である。彼に聖書を読んだことがあるかと尋ねると、新約は少し読んだと云う。その淨き言を一つ一つ賛嘆していた。そこで、旧約も読む気が起きたら読むべきであることを話した。彼との物語は小さき大工小屋に尽きず、時の移るを知らなかった。その中に彼は蜜蜂の家を一つ拵こしらえた。細工は隆々たるものである。彼はスキーの名手である。今年は日本のレコード(ジャンプイング)位やぶつて見せると意気こんでいた。彼は冬が待たれると言っている。

彼は全く自然の愛児で、都会の雑閑をこのまず、田舎にかく生活するを真に幸福なりと感謝し、大工の事に満足して日を送っていると、18才の体軀の丈夫はその心もまことに感心すべきものである。学校は小学生を終えただけである。父、三郎治氏は五代目はしごで、自分が六代目であると。赤倉最旧の家である。大工道具は一段と大きい。昔の為朝の梯はしごがある。人一倍の仕事なすそうである。正にしからんである。彼はまた炯眼居士で、面相を見てその人の人柄を観破し得ると。誠に僕の性質をもよく見抜いたと見える。あなたは詩人的であると云う。彼は木の性質をよく見抜くことから眼が鋭くなつて、ついにかく人をもよく見抜き得るようになったと云う。なかなか面白い。その体格、筋骨の逞しいこと、実に羨望の至りである。まだ18才の少壮者である。前途多望なる彼に幸あらんことを。

彼はあわれむべき心の人を見ると、その人のあわれな心のために祈りたくなると云うことを言った。淨き哉、寛なる哉、彼の心。全く感心した。彼とのはなしは尽きず、夕食の鐘の音に驚かされて帰る。

夕食は大食堂の、塩田一家と僕たちだけ、雨と霧とに霞める赤倉の景をながめつつ。ああ、しずけき夕。去年の今日とその相違の如何に大なることよ。幸なる哉。

よき友を今日は得た。大工北村君。我が友よ、幸あれ。就寝10時。

汝貪る勿れ。政美は辰雄なり、辰雄は政美なり。

勇みて進め、主の聖業のために。アーメン。

○1924年9月2日(火)

驟雨折々来る。起床6時10分前。午前、関温泉方面へ散歩に行く。実に好い天気であつた。



大自然。山、樹、草、虫の声、花、水。我が眼界は之のみ。友はこれらであった。大瀧の岩上に坐して、瀧の飛沫を浴びつつ、その勇ましき飛流を見た。帰途、「いわかがみ」に類せる植物の葉を採集して推葉にした。帰途、昨日の大工小屋に立ち寄って、余り木で小さな家を作って遊んだ。彼は箱を頼まれて作っていた。レン子さんがお昼だと言って迎えに来た。お昼は名物の鯛が出ていた。もう、お魚を食べるのも今日限りと思ったから、食べた。日本海の生き生きした鯛が食べられなくなると思うと、今まで少々飽きていた口も急に直つてうまくなる。精神のはたらかしは何事にもかくの如しと思つてつくづく感ずる。

食後、午睡。また大工小屋へ行つた。小さい家を作り上げた。初めて鑿を使って窓を作つた。彼は記念のために僕に組立式の簡単な本立を作ってくれた。また、白樺のステッキを1本くれた。彼との感想談は尽きず、話はそれからそれへと続いた。大工小屋の数時間は実に恵まれたる淨き楽しき感謝なるものであつた。昨日今日のこのうれしさは忘れられぬ。彼は純なる基督教者の一人であることが今日よく読めた。彼は見得ざるエホヴァを信ずる。彼は十字架を仰ぎ瞻て感謝している。地位も名誉も金も要らぬ。忠実なる感謝なる歡喜なるその日暮らしが最も幸福である。一日の思い煩いは一日で足れり。明日のことは明日なりと云う教を有難く信ずる彼を見ては、僕も嬉しかった。一言一句が同感同感である。偉大なる精神と偉大なる体軀。知られざるの一大工に学ぶところ大である。ロングフェローが、村の鍛冶屋の生活を見て詠みし如く。僕も村の大工を見て一つ詠まざるべからずである。彼から歌をもらつた。彼の号は孤漂と自称した。孤り自然の間に漂々と漂うより名のりしと云う。まことにいい名だとほめたら、笑つていた。

ホイットマン流の散文詩である。かなり感心した。和歌も2首あつた。妙高山へのぼつて感じて詠んだという。また、昨夜11時頃静けき夜を見て詠んだと云う。彼はその健全なる精神を妙高山によつて神より賜つたのである。羨むべき哉、幸なる哉である。

別れにのぞんで、彼は明笛を2、3曲吹いてくれた。多年の熱練で上手である。時に戸外は烟雨と雷鳴、如何にも山奥らしき景。一小陋屋、大工道具と木屑に囲まれて二青年は神のことを語り、人生と神との關係を学びたるは実に、ナザレのイエス・キリストを偲び、思い、仰ぎ瞻るにふさわしき淨きことであつた。エス様、御覧になつてさぞ歎ばれ恵みを与えられんことと信ずる。讚美歌を一曲吹いてくれた。その間、祈りつつあつた。二人は日の暮れるまで神と共に在つてはなし、暫くの別れをなした。大工小屋の戸は閉まつた。

烟雨が朦然と四囲をつつんでいる。電灯がボーツとしている。夕食時をすこしすぎているので、大急ぎで食堂に行く。鯛とオサシミ、日本海のお魚も暫くと思つて、皆美味しくいただいた。ビールを少しいただいたが、とりわけ美味しく感じた。今夏、赤倉最後の晚餐を大食堂に4人で認めた。荷のことで9時までごたつき、入浴して、ゆつくり心を落つけて日記をしたためて寝るのが11時。

思い出したからまた書く。彼大工は18才にして面貌は24、25。1日、米を1升、少ない



ときが8合。驚いた。飯と味噌汁があれば何も要らぬと云っている。味噌汁はよくのむうである。あつたまつて、精力がつくと云う。粗食は健康をもたらす。菜食と淨き空気と運動と健全なる精神、それが彼を生んだ。育てたのである。

神よ、僕も体質はまことに良いのであります。これは神様が賜いしものであります。願わくはこの御恵をそこなうことなく、完全に受けしめるような健全なる精神を与えたまえ。然らば健全なる身体は立つに至ると信じます。ナザレの彼の大工の兒の如く。神よ、この願いを基督者イエスの御名を通して捧げ奉ります。アーメン。

しずけきこの大自然を棄て去ることはまことに惜しくある。しかし、帰りなん。母上ぞ待ち給うなる。山より湧き出づる自然の温泉に打たれて——お腹を——今晚はしみじみと、お腹を全治せしめられる感に打たれて有難かった。この赤倉の40日の効は必ず後に至りてあらわると信ずる。神に栄光あれかし。アーメン。

○1924年9月3日(水)

愈々、赤倉を去るの日が来た。その旭日は実に美麗であつた。その大気は実に清く澄んでいた。その温泉は実に心地よくあつた。その朝の散歩は何とも言えぬ感謝なるものであつた。最早これより長くはいることは出来ない。神は十分に恵を垂れ給うた。午前10時の汽車で赤倉を去る。自動車で高原を去つた。別れを告げる人は、塩田さんと宿の人だけ。懐かしの高原を去るにはあまりに早すぎる様であつた。斎藤さん達と4人だけである。汽車は、生まれて初めてと云つてもいい位であらう、2等車に乗つた。車中はあついと云つても、もう9月である。長野で昼食、お弁当を食べる(宿からの)。それから軽井沢までは相当暑かつた。軽井沢で、氷菓子なるものをはじめて食す。碓井峠を下るのはいい氣持がしない。と云うのは下界に下る様であるから。高崎でうなぎとどんぶりを食す。電車は、幸にすいている。7時半、上野着。威夫さんが迎えに来て下さつた。皆で自動車で帰る。西瓜2個は富山入田から、赤倉に4、5日滞在、而して叔父様と僕によつて運ばれた、お土産である。着宅。兄上様と早速お会い出来た。母上様、キミちゃん、孝さん、新しいいい顔でお会した。兄上様は10時の汽車で宇都宮へ行かれた。相変わらずお忙しい。

○1924年9月4日(木)

曇。涼しき日であつた。夏もそろそろ去り行くのである。東京はもつと暑いと思いの外であり有難かつた。朝夕は誠に凌ぎやすい。今晚、井本様のお家で赤倉会を開いた。四郎ちゃんと斎藤さんと僕とは仲町のお家へ行つた。威夫さんのお料理である。サラダ、ビフテキ、実に玄人である。感心した。すべの御馳走が美味しかった。富山入田の西瓜——斎藤さんと二人で持ち帰りしお土産——は実に素敵だった。つい、満腹したのはわかつた。話は尽きなかつた。愉快的な会合であつた。



○1924年9月5日 (金)

雨。今日も楽な日。夜、斎藤さんへ遊びに行く。

○1924年9月6日 (土)

晴後曇。富美ちゃん、少々お腹がゆるむため、痩せた。母上様も少々お腹の具合が悪くて痩せて居られる。でも着々よくなられるようである。興行銀行へ行き、丸ビルへ行き、「How to swim」を丸善出張店で買う。帰り、九段の向山堂で『聖書の研究』を求む。

○1924年9月7日 (日)

晴。今日は好い天気である。片瀬へ行けばよかった。四郎ちゃんと宣ちゃんは行った。快晴の天気は終日続いたが、2、3日涼しかったのか、照つても暑くなく本当に秋らしかった。斎藤さんへ遊びに行く。

○1924年9月8日 (月)

晴。午前、三越へ御用で買物に行く。京橋まで歩いた。夜、再び銀座へ行き、荒川さんへ御相談に行く。水戸へ行くことを勧められる。

○1924年9月9日 (火)

晴。南先生に診て戴きに木挽町の病院へ行った。非常によくなったと云われた。目方も少しは増えた様である。今日は三弦さんの誕生日である。

○1924年9月10日 (水)

晴。午前10時頃、文部省の齒科研究所へ行ったが、時間が遅くて新来者はだめだった。染井の井上さんへ行った、母上の目薬をとりにお墓へお詣り行った。お墓の石は日に照らされて乾き切つて居た。大桶に一杯汲んで行った水をすっかり濺いで上げた。大きい兄さん、水好きの兄上には一番多くかけて上げた。見るも涼しげに水は流れた。その中に水は涙の如く流れた。僕の罪のために、赦しを乞う兄上の涙であった。またその水は、熱烈なる怒りの汗の如く流れた。それは僕の、サタンと共に歩みて神を離れし生活に対する兄上を通しての神の怒りであった。僕は到底、居たまらなくなるのであった。しかし、やはり愛の力がその奥に深く宿つていて僕を棄て給わなかった。誠に汝は罪人の首領である。

もう、今となつては、何のかんのと罪を指摘し怒り給うにさえ、神は飽き給うたようである。殆ど眼をはなさんとさえし給うようである。しかし、そんな神は我が神ではないのであった。神は、やはり熱愛の神であり給うのであった。

僕の虚栄、虚偽、傲慢、貪欲を悉く焼き尽くしたまえ。浄め給え。主の御命令に服従せ



しめ給え。主の聖業に一途に従わしめ給え。主は必ず恵み給うと信じます。人言何ものぞ。我はただ主に従いて歩みます。アーメン。

○1924年9月11日 (木)

晴。

「なんぢらは喜びて出きたり平穩にみちびかれゆくべし」(イザヤ55・12)

昨日、北京の兄上と共に祈る。「行く」か「止まる」か、今日この問題を作りたるをよくよく顧み、静かに神に祈り奉った。僕の精神一つで、「行く」も可なり、「止まる」も可なりであつた。どっちでもよくある。僕は安心して染井から帰って来た。帰途、電車で眼を閉じて再び神にうかがつた。すると神は「行け」と仰るのであつた。その御言は次第に明晰になるのであつた。「然り、神よ、我は行かん」とお答えした。家へ帰って、黙していた。母上にさえお話ししなかつた。10時就床した。松虫の声が本当に可愛らしい。

今朝、目覚めたのは6時。秋風が本当に訪れて来た。一寸、絵でも書きたい位であつた。母上様と朝食前の散歩をした。30分ほど歩いた。秀英舎を一周して北町へ出て、アメリカンベーカーリーでパンを買って戴く。朝食は黒パンにバターと蜂蜜、卵。ゆっくりして、そろそろ水戸行準備をはじめた。10時50分のにしようと思つたが、すこし忙しいので、12時半の汽車にした。10時、母上に、水戸へ行くこととお話しした。

「行つて参ります、理由はございますが、お話し致しません。確信するところがございいますから」

と申し上げた。母上はよくおわかりになつて下され、快く承諾して下さつた。数日来、行こうか行くまいかと、あれほど迷つたことが、こんなに明瞭に決着したのは不思議な位である。神の言なり、人の言に非ず、神の御命令なり、人の命令に非ず。僕を動かして導くものは神のみにして、如何なる人にも非ず。僕の深き深き、大なる大なる、多き多き、罪を一つ一つ、神はよく知り給う。而もこれが悉く贖われたのである。主イエス・キリストによりて贖われたのである。汝、罪人はかくして未だ神に見棄てられていないのである。

汝の義務は學業に従事するにある。然るを、ボヤボヤと家に居ることは到底ゆるされぬことである。汝の体質は誠によくある。故に精神により汝は十分に健康体となりて働くを得るものである。「要は汝の精神に在る」。故に、東京に居るも、水戸に在るも、精神一つで健康になりもし、体を害しもするのである。ここに於て、勇猛心を奮い起こして敢然と立つたのである。東京に、心かなう勉強をして半年を送るも可であるが、それはあまりに勿体なくある。この確信あれば十分にこの半年を水戸に送つて効果を挙げ得るのである。靈的に救われたことはすべてに救われたことである。鞏かたき信念を持して進むところ何ものか遮げ得ん。神は、益々、確實に救い給うのである。

昨夜、物干台の上にのぼつて月下に祈り奉る。仰臥して天を望み瞻れば、僕の真上に北



の十の字に、その星の配列に倣って手足を伸ばして、偉大なる美わしの天の十字と共にあった。心はその如くあつた。感謝して下りて来た。僕の心はかたかくたく磐石の如くされた。神は、「行け」と明瞭に。僕は、「行きます」とハッキリと。

斎藤さんのおばさまに御挨拶して、はやお昼を載いて出る。時間がないので、母上までが手伝って下さる。鰹節を搔いて下さった。お豆腐と摘菜にかけていただく。母上と握手を雄々しく。

12時40分の発車まで20分ある。発車。なかなか暑い。午睡の時間が来た。眠くなつて車中に常の如く睡をとる。眼がさめるころ、雨が勇ましく斜めに降り出した。「ああいい雨だ」と独語した。雲がムラムラと湧いていた。暫く降って歇んだ。田畠、川の潤うてみずみずしいこと。田舎はいい。自然の青色を見て、実にうれしく、蘇生の感である。東京にまさる数等。水戸へ4時すこし過ぎ着。ただちに自働車で桐寮へ来る。誰も居ない。学校へ行く。附属の連中に会う。宣ちゃんは10時の汽車で来たとのこと。夕飯はパンと卵とミルクと苺とリンゴで独りで食べる。静かでよかった。比企野が遊びに来て、少しはなした。あとはまた森閑。独りで秋気にひたつて感謝の時をおくる。就床10時半。

イザヤ書第55章を感謝に溢れて読む。

○1924年9月12日 (金)

雨。起床7時。洗面は井戸水で、冷水摩擦も井水で。気持がよい。庭の草木も都のとは違つて生き生きしている。青い朝顔が咲いている。オイラン草が眼のさめる様な赤い色をしている。曇っていた。間もなく降り出した。登校の道の草木が生い茂つて道幅がせまくなるまでに。

第2学期の劈頭の時間はグンドルト先生であつた。はればれした顔で僕達をむかえた。僕もこれに答えた。熱心なる先生は非常な元気で愉快に1時間を送らせてくださった。一事をなすに忠実なるは幸なる哉と思つた。

Erinnern Sie sich etwas Schönes in den Ferien? (休暇中の何か美しいものを思い出しますか?) と問われたときに、僕は

Als ich am Akakure war, sah ich einen großen, schönen Regenbogen welchen über eine Stunde lang stand. (私は赤倉に居たときに大きな美しい虹を見ました。それは1時間も長く懸かつていました) と答えた。実にあの虹は素敵だった。

雨がザアザア心地よく降る。道はぬかつても雨は好い。午後からは両教授欠勤、授業なし。益々シメである。夕方、買物に出掛けてあとは静かに桐寮に第1日をおくる。佐竹と宣ちゃんと3人だけ。斎藤さんにお手紙を書く。今度のこの行のために。



○1924年9月13日(土)

晴後雨。今日も1時間授業なく、自転車を赤倉の方へ駆った。小川が奔流している。梨畠や林檎林に黄緑の玉が光りだした。午後からはなかなか暑いので午睡後、那珂川へ泳ぎに行った。濁流滔々であったが、暑いので濁っているなんて言って居られなく水に漬かった。危険を十分慮って、川の中央の方へは泳ぎ出ず、岸に沿って泳いだ。初めて那珂川で泳いだわけである。とにかく愉快であった。帰寮、入浴、休憩、夕食。宣ちゃんと二人だけ。佐竹は出る。今晚は十五夜と云うので、オハギとオダンゴと栗があつた。惜しいことに月が出ていない。月どころか雨がサラサラと木の葉を叩く。静かもこれ位、静かだと、全く素敵である。桐寮の二人もまた可なりである。

○1924年9月14日(日)

晴。午前6時半、起床。Miltonの“On the morning of Christ's Nativity”〔キリスト降誕の朝に〕を読む。午前10時頃、富山のところへ行く。姉君が逝かれたとのこと。1学期の試験はために受けなかったと。去年から不幸つづきで気の毒であつた。11時半頃帰る。午後から比企野と宣ちゃんと3人で川の方へ散歩に行く。むら雀が田を荒らすこと大である。石を投げると蜂の様に飛び立つ。栗が大分みのつて来た。秋色たつぷりになって来た。夜、蓄音機を聞く。消灯10時。

○1924年9月15日(月)

晴。起床6時半。自転車、キャッチボール等の運動をする。
基督の如く。基督的生涯。我は飽くまでもこれを。あたりは俗世なり。如何なる言辞も、如何なる手段も、最早、我を動かすには余りにつたなくある。我は主によりて強し。岩なり。主よ、感謝し奉る。我は主のえられたるものなり。勇み勇みて主の聖業に励まん。身心健やかならんとす。

○1924年9月16日(火)

雨。雨が降って少し冷や冷やした。身体の場合は次第によい。雨中、フットボールは愉快だった。運動が出来ないほど降って来た。

よく考えて見た。汝の身体の損失は大なりき。汝は愚の愚のかしらなりき。汝の時の損失もまた大なりき。然れども汝はそれよりも大に恵まれたり。今は無なり、弱なり、小なり。然れども時至らば、汝の実は豊かにして、大にして、光あり。これぞ神に感謝し奉る。願わくは導き給え、神よ。我は主によりて生命なり、強き者なり、豊かなり。アーメン。



○1924年9月17日(水)

雨。よく雨が降る。秋を忘れて直ちに冬を招いた様である。一つしかない夏服がジグジグにぬれても着なければならぬ。桐寮は3人である。近藤はギターを弾いている。彼との間に面白からぬことが起こらねば幸である。彼はやや僕と、本当を云えば全然僕とは合わぬのであるが。僕は狭くならないで桐寮を守るものである。桐寮に入って桐寮を出るべきものである。多くのものは桐寮を出たり入ったりしている。そして今、自分勝手に出てくるものが多い。あてにならぬ人である。自分勝手なるは今の人である。しか言いて別に彼等を悪むものでもなく、遠ざかると欲するものでもない。彼等には附属のよいところもある。しかし、足らぬが「愛」である、「和らぎ」である。

○1924年9月18日(木)

晴。新聞を見れば果たして出水である。さて今日は、雨後の晴天で蒸す。暑い。フットボールをしたら身体がゆでたこである。喝をおぼえて、晩の汁がうまかった。

独逸語が面白くなってきた。語学は興味の出てきたときに、ウンウンやるもんだ。大いに読もう。僕は人よりおけている。本も読んでないわけである。一層読まねばならないわけなのだ。そのわりに皆が進んでいない様である。負けずにやれ。実行実践、これ我がつとめ。口も要らぬ、筆も要らぬ。

○1924年9月19日(金)

晴。秋らしいよい天気である。昨日も地震があつたが、今日もあつた。震源地は鹿島灘であるとのこと。学校がつぶれればいい、なんて云っているけれども、いざそんなやつがやつて来たら、僕達のもとはあぶないわけだ。昨日なんかも窓からとび出したのが随分居る。今日もフットボールをした。梨が盛りである。栗も熟し出す。柿もなっている。

貪るものをして貪らしめよ。我は知れども争わぬ。彼の如き奴を相手にしては己れの品性が堕ちる。金銭の損、我が人たることの堕ちることに比すれば何ものぞ。金銭は之、塵に等しと心得て可なりである。決して粗末にするの意ではない。貪るものは自滅するのみ、施すものは与えられる、である。

キリストは降りて昇り、昇りて今や広く万物に満ちんとして居たもうのである。我等彼の僕もまた此の途を取らなければならない。先ず第一が降ることである。自己の奥底に降つて、其処にその何たる乎を発見すべきである。自己は腐れたる者、善なる者の在らざる所、暗き罪の塊である。此事を知るが凡て発展の始めである。そして自己の深海に降り、其処に居るに堪えずして、上なる神の光を仰いで、ここに恩寵と信仰とに依り、上へと昇り初めるのである。——内村先生。



○1924年9月20日(土)

晴。3時間目が終わるとすぐ学校から帰って上京の支度を一寸の間にすませて水戸駅へ急いだ。12時一寸前に着いた。12時10分発車。かるくパンでお昼をすませた。赤塚で団勝磨君が乗った。共に東京へ帰った。吉原の叔母様が来て居られた。夕飯は、久しぶりで蟹の御馳走になった。子守が病気で兄はそれを送ってお国へ行かれた。演習の休暇4、5日の中、2日をこれのためにさく。兄上の御多忙に同情する。その健康たるや実に有難きものである。それに対して僕の非健康は誠に申訳なきわけである。入浴。母上御健全、喜美ちゃん大元氣。うれしくあった。

○1924年9月21日(日)

雨。天候やや悪しくあった。母上と教会へ行く。久しぶりで駒込教会へ行った。富永先生は相変わらず御壮健で、しんみりとした御説教をされる。教会を出るときは雨がザーザー降っていて、お墓詣りをするのをやめて帰った。終日、家に居た。兄上は朝帰って来られた。多忙、過労でかなり瘦せられた。睡眠の休息を大いにして居られる。夕方二人でお湯に入りに行った。兄上は津田沼の蛤を非常によくこんで食べられる。僕は東京のパンと赤倉の蜂蜜がとてもうまい。一家楽しく団欒した。就床9時半。団さんから御鄭重な御供物を兄上の霊前に戴いた。

○1924年9月22日(月)

晴。3年。波瀾の3年。激変の3年。罪、過失、涙、感謝、恩恵。

如何に意義深かりし。如何に思い出多かりし。如何に涙の連続なりし。如何に感謝と希望にうつり行きし3年なりしか。

ああ、1924年9月22日より3年の過去をたぐり行くときに、そこに見出ださる様々の出来事の如何に胸を刺すなるよ。3年、神よ、最早、我をして筆を走らしむることなからしめ給え。あまりに多くの罪、あまりに多くの過失、あまりに多くの涙、あまりに多くの感謝があるが故に。3年！ 黙祷！

午前、団さんへ御礼に参上して、1時間半ほど勝磨さんとお母様とお話した。帰途、半蔵門のところで、摂政宮殿下、良子妃殿下のお通りを拝し奉り得たのは、はからざる幸なことであつた。九段坂の向山堂で、内村先生の『羅馬書の研究』新刊を買った。それから“Commentary of Daniel”と“On Thought of Daniel & Revelation” “Channing’s Complete Works”の3冊を買った。何れも古本で、青山学院のOrtmanと云う独逸人の売払ったものである。価値廉でかかる良書を買得た幸を喜んだ。而も、今日は兄上の召されて正に3年目の日である。帰宅して早速、霊前にお供えた。よろこんで下さったことと信ずる。

吉原の叔母、レイちゃん、青木の叔母、四郎ちゃんが来て下さった。五明のおきよさん



がわざわざ来られたのはお礼をよくよく申し上ぐべきことであつた。夜は山本の姉さんが来られて、晚餐を共にした。母上、姉上、僕と、残れる4人は親しく晚餐を共にして兄上を偲んだ。栗ぎんとん、梨、林檎、松仙堂のお菓子、葡萄、羊羹など兄上のお好きなものが供えられた。

お墓詣りをしたのは、日が暮れてからのことであつた。僕が独りで皆を代表して行つて来た。お線香のみが暗に4ツ光つて香が時々馨つた。四囲は寂然、暗澹。杉の樹のかげが星の空に黒くうつつていた。兄上の墓前に立つてお祈りすること多し。木星が炯々とその前で光つていた。兄上の霊はかの天上の木星に光っているが如く感ぜられた。

3年。兄上は3年。長き3年、苦しき3年。我々のために天に祈りつづけられた。

而して、今やその祈りの曙光が現われて来たのである。

母上に感謝と希望の信仰の心あり。

兄上に感謝と希望の信仰の心あり。

姉に感謝と希望の信仰の心あり。

願わくは、我々もまた信仰の勇者とならしめ給え。

願わくは、実行によりて信仰の実践者たらしめ給え。

栄光すべて我々の神エホバにあれ。アーメン。

北京の兄上の霊を僕の信仰の真中につめこまれて、僕はお墓を出て来た。あとか宛も兄が再び来りし如く。政美に辰雄あり、辰雄に政美あり。忽同体である。天に祈る霊あり、地に働く体あり。

○1924年9月23日 (火)

晴。秋季皇霊祭。今朝は皆で寝坊した。昨晚おそかったからである。荷物があるので今日は早く帰ることにした。兄上にも荷造りのお手伝いをしていただいた。来月上旬のときまで、おきげんようで、いさぎよく出で立つ。こんどはもつと太つて帰つてやるぞとの念は燃ゆるが如くあつた。車中一人。帰寮5時。就床9時。さて明日から

Work while you work. [働くときにはよく働け]

Play while you play. [遊ぶときにはよく遊べ]

そして神様に僕の希望を聴いて戴く。安らけく眠らしめ給え。アーメン。

○1924年9月24日 (水)

晴。放課後、テニスをする。初めて新しいラケットをつかった。時間の費いかたと、精力の使いかたのなかなかむずかしいことを感じた。一日は忽ちたちまにして去る。これを思うと、一年は短い。一生もまた短い。一日を筍茸にせざらんことを学ぶべきである。

我が水戸桐寮室内に於ける座右の友は多し、偉なり、親しむべしである。彼等は、日、



英、独のバイブル、内村先生の『羅馬書の研究』。“Abide in Christ” “Poetical Works of Milton”。トルストイ、菜食論と禁酒論。『新生命』、アンドリュー・マレー。ケーベル先生小品集、“The Cambridge Book of Poetry and Song”。“Holy War” Bunyan。『宗教と現世』内村先生、『旧約と新約』『聖書の研究』、『永遠の希望』『聖貧』……等である。

○1924年9月25日(木)

晴、夜雨。食るものをして食らしめよ。傲慢なるものをして傲然たらしめよ。我はかわるところなし。ただ彼等をあわれむのみ。神よ、我が希望を聴き給え。主よ、我は主にのみ近づかんこと日々のつとめとなすのみ。我が智も、我が身体の健康も、我が愛も、我が希望も、すべて主の聖旨のままに。赤裸々の赤子として主の舟に居らしめ給え。行くはただ主に。

○1924年9月26日(金)

晴。桐寮で朝起きる順と、夜寝る順は、ちゃんと定っている。即ち、僕、宣ちゃん、近藤の順に起きそして寝る。佛蘭西語をやるうと思つたが、身体のことと、精力のことを思つて、実行しかねると思つたからやめることにした。英独を先ずやつつけなければである。放課後、運動をする。夕方、入浴した。友達のところへ行つておそくなり、それから勉強したため、夜は11時になった。初めて不規則をやつた。よくないことである。

○1924年9月27日(土)

晴。夜はなかなか寒くなった。朝も冷や冷やして来た。しかし冷水摩擦は実に快たるものである。バケツの残り水をぶちまけて、新しいのを井戸から汲む。汲みたての清水で身体をキュッキュツ拭く。心身爽快である。朝食がこのために如何ほど美味しくされるかわからぬ。午後から運動、散歩をする。夜少し読書。しずかで実に好い。

○1924年9月28日(日)

晴。午前、バイブル。『羅馬書之研究』。何とも言えぬ楽しき2時間を戴いた。午前10時半から12時までテニスをした。よい運動であつた。日がかんかん照つて秋にはめずらしいほど強くある。二人で泳ぎに出掛けたところ、風が吹いて川べりに出ては流石に入る気になれず、散歩をして帰つた。それから自転車で30分乗り廻した。入浴して夕食を食す。母上様からお手紙を戴く。夜、林が東京から来て、宿る。附属の連中が数人来て、10時まで遊んで行つた。僕は独り、間食の仲間入りが出来なかつた。主の御命令である。



○1924年9月29日(月)

雨。朝は寒冷を感じる。午前よく運動した。雨が降って来た。雨を衝いて、お昼をたべに帰る。午後からは風が加わった。傘が折れそうになった。夜に至って静まった。下宿料の金の問題はいやだった。

汝の信仰おとろえざる様、否、もつともつと燃える様に、上を仰ぎ瞻て事をせよ。

今日のグンデルト先生のお話しは実に感銘した。と同時にに僕の不勤勉を、先生に無言の中にあやまる次第であった。マタイ伝5章、13章より16章までの主の御言の実行者たらんと我、深く感じた。政美兄上を思い、我を思つて、涙であると共に、我が血は今日、沸きかえるのである。

主よ、願わくは、主の僕、主の忠実なる活発なる僕たらしめ給え。主によりて働くところに、よき働きとよき休憩とあり。アーメン。

○1924年9月30日(火)

曇。9月は去る。10月が来る。旧きを後にして新しきに進む。この日記をつけ始めてやがて2年にならんとしている。波瀾あり、汝の悪を棄てて、否、汝の虚しき善さも棄てて、イエス・キリストの善なる業に進めよ。夜は夜もすがら泣き悲しむとも朝には歡び唱うべし。えらばれたる者よ、覚めよ。信仰の大奮戦を我は与えられたるものなり。而して神は十分にこれに勝ち得る力をも与え給うなり。さらば9月よ行け、10月よ来れよかし。

